


 浄土宗の羅針盤

COMPASS

http://www.hodojin.net

 発行所: 東京都豊島区南池袋
 一丁目十三番十六号
 日蓮正宗法道院法華講
 03 (3984) 2650

浄土宗はどのように信仰 されているか

日本は仏教国といわれるように、日本人の心に根ざしている信仰の代表的なものは、仏教です。そのなかでも多くの人が我が家の宗旨ですというものに浄土宗があります。ところが、不思議なことに、それらの人々は、今まで他の宗旨だったのですが浄土宗の教えが素晴らしいので、自分の意志で浄土宗に入信しました、という方はほとんどいません。また、浄土宗は、どのような宗教ですか、とお聞きしても先祖代々の宗旨で念仏を唱えるという以外に、浄土宗がどのような宗旨なのかを知っている人はまれのようです。ただ、身内が亡くなったとき葬式をしてもらい、お墓を維持管理してもらったためのお寺が、たまたま浄土宗だった、というくらいのかえりの方がほとんどではないでしょうか。お盆やお彼岸には、お墓参りに行くことはあるようですが、だからといって、お経をあげ、先祖を回向するといった行為もあまり見受けられません。

宗教は、本来、人としての正しい生き方を教え、その実践を通して、信仰者を幸せに導き、社会に貢献していくものであるはずですが、ところが、浄土宗は、宗教が本来持っている役割を果たしているようには見えません。それは、あたかも宗教としての寿命を終え、形骸だけがまだ残存しているように見

えます。では、そのような浄土宗とは、いったい、どのような宗旨なのでしょう。今回は、そのことに焦点を当てて、浄土宗を考えてみることにしました。

末法思想と浄土宗の成立

仏教では、末法という言葉がよく使われますが、末法とは、どういう意味の言葉なのでしょう。それは、釈尊が亡くなられて後、二千年後の時代を意味しています。末法の末とは、漢文では否定形として用いられ、末法とは、釈尊の法（白法）がなくなった時代、釈尊の法が効力を失った時代のことを指します。釈尊が入滅してのち、二千年後、釈尊が説かれた教えに人々を救う力がなくなり、経巻のみがあるだけで、正しい修行も功德もなくなり、自然災害が多発し、不治の病が流行し、人々の間では争いの絶えない時代が訪れると経巻には説かれています。

これは、日本では平安の末期から鎌倉時代の初期にあたり、この時代は、まさに釈尊の予言通り気候は不順で人々は飢饉に苦しみ、そのうえ疫病が流行して死者は巷（ちまた）にあふれるという惨状を呈していました。また、時代は貴族による摂関政治が終りを告げ、武士が台頭してくるといふ動乱期で、人々は、末法の到来を不安に怯えながら迎えました。このような時代背景の中で、現実の世を力強く生

き抜くのではなく、現実を逃避し死後の極楽往生を願う教えとして登場したのが法然を開祖とする浄土宗だったので。

法然は、中国浄土宗の三師（曇鸞へどんらん、道綽へどうしゃく、善導へぜんどう）の教えを学び、日本に浄土宗を広めました。釈尊の説かれた一大仏教に対しては、まことに無知だったと言わざるを得ません。なぜならば、釈尊は、末法の時代が到来することを自ら説き明かすと同時に、末法には末法の仏様が現れられることを法華経に、きちんと予証されているからです。

釈尊が説かれた経典は五千、七千といわれるほど数多くありますが、それらには順序次第があり、釈尊がこの世に現れた本懐（真の目的）は、その中でも最も優れた法華経を説くためにあったことは、法華経の開経である無量義経に「四十余年間法を説いてきたけれども、今だ、真実を顕してはいない」と説かれ、さらに、法華経方便品に「正直に方便を捨てて、ただ、無上道（最上の道）を説く」と法華経こそが、釈尊の説かれた唯一最高の法であることが明らかに示されています。

ところが、浄土宗は、釈尊が方便として説いたのであるから正直に捨てよと言われた、観経、観無量寿経、阿弥陀経を依経（根本の教え）として成立した教えなのです。

さらに悪いことに、法然が師とする中国の曇鸞は、釈尊の本懐である法華経を難信難解（信じがたく解

浄土宗とは、どのような信仰か

釈尊の説かれた末法の 仏様とは

しがたい)であるから、末代無知の人々の機根にはかなわないと法華経を排斥し、ただ、浄土三部経のみが末代無知の人々の行い得る道であると説き、道綽は法華経は、未だ一人も得た人はいないと暴言を吐き、善導は、法華経を難行として、成仏する人は、千人修行しても一人もないと罵(ののし)ったのです。

これを知った法然は、『選択本願念仏集』で、念仏のみが衆生を救う教えであり、そのほかの法華経を含む一大聖教は、捨閉闍抛(しゃへいかくほう)せよと説き、それらの聖教を捨てよ、閉じよ、闍(さしお)け、抛(なげう)てとの悪見、邪見を展開したのです。まさに、天を恐れぬ所行だといわざるを得ません。

法華経には、「若(も)し法を聞くこと有(あ)らん者は、一人として、成仏せずということ無けん」と法華経の功德の甚大なことが説かれています。それにもかかわらず、法然は、この法華経を捨閉闍抛せよと説いたのですから、法然の教えは、仏の教えに弓を引く邪教といわざるをえません。さらに法華経には、「若(も)し人信ぜずして、此の経を毀謗(きぼう)せば、則(すなわ)ち一切、世間の仏種を断ぜん(中略)其(そ)れ斯(か)くの如(ごと)き經典を、誹謗すること有(あ)らん(中略)其(そ)の人命終(みょうじゅう)して、阿鼻獄(あびごく)に入(い)らん」とあります。法華経を信じないで、誹謗中傷を加えるならば、その人は、地獄に墮ちるといいます。このように、法華経は尊い經典ですから我々末代の機に合わないとする浄土宗の僧侶が、不信誹謗の失(とが)により無間地獄に墮ちることは、この御文からも明らかなのです。

これまで述べてきたように、末法に入り、釈尊の法はその役目を果たし終えました。しかし、そのことによって仏教が滅びたわけではありません。釈尊は、末法に入ってから仏法についてもきちんと説かれて生涯を閉じられているのです。

では、末法に入り、釈尊の法が滅した後、どのような仏様が現れられるのでしょうか。また、それは、一体、どの經典に説かれているのでしょうか。

実は、そのことが釈尊の出世の本懐である法華経に説かれているのです。釈尊は五十年間にわたり法を説いてきましたが、最後の八年間に、自分自身がこの世に出現した一番の目的である最も重要な法を説かれました。その法こそが法華経だったので。ですから、それ以前に説かれた法は、すべて法華経を説くための方便の教えだったのです。浄土宗が依経とする観經、観無量壽經、阿彌陀經も釈尊が法華経を説くための方便のための教えであることは、いうまでもありません。

さて、法華経に説かれた末法の仏様についてですが、法華経には、どのように説かれているのでしょうか。

法華経には、その仏様は、末法に現れて法を説くが、ある時は所を追われ、また、ある時は、時の権力者や出家在家の人々に迫害を受け、石を投げられ、杖で打たれ、あまつさえ、刀の難まで受けられながら、一切衆生を成仏に導き、幸せにする法を説いていくと説かれています。

その仏様は、末法の衆生の闇を払い、人々がもっている尊い命を輝かせる大白法を所持され、その法を説くために、いかなる難も耐え忍ばれるのです。

日蓮大聖人は、末法の一切衆生を救うために、法華経に予証された通り、数多くの法難に遭いながら、唯一無二の法を説かれました。そのお振る舞いは、まさに、法華経に説かれたそのまを身をもって行じられ、まさに、末法の仏様であることをその行動によって証明されたのです。

真実の宗教とは

人は、苦しいことや悲しいこと、また困難なことに出会ったとき、それを解決し克服する方法について思いをめぐらします。しかし、その解決方法を見いだすことは容易なことではありません。

仏法では、生・老・病・死など人間だれもが直面する人生の本質的な苦悩を根本的に解決する道を説き示しています。そして、その本質的苦悩を解決せずして、真の幸福はありえないと説いています。

真の幸福とは、観念的なものではなく、因果の道理をもととした正しい信仰によって、自己の内面にある健全な生命を確立し、深い智慧と強い心を養うことによつてはじめてもたらされるものです。

さて、「正しい」という字は一に止まる、と書きますが、正しい宗教が二つも三つもあるわけはありません。釈尊は、十方仏土の中には、ただ一乗の法のみ有り、二無く亦(また)三無

し、と法華経に説かれています。

このことからわかるように、末法に生きる現代の私たちが信じるに足る正しい教えは、ただひとつしかなく、その教えを説かれた方は、末法の仏様である日蓮大聖人なのです。

日蓮大聖人は、末法の一切衆生を真実の幸せに導くため、最高尊極の法である南無妙法蓮華経を唱え出されました。その日蓮大聖人の教えを七百年間にわたって現在まで清浄に誤りなく受け継いできた唯一の教団が富士大石寺を本山とする日蓮正宗なのです。

私たちは日蓮正宗の信徒として、法道院(池袋)で信仰に励んでいます。どうか、みなさんも、真実の仏法と出会って、かけがえのない人生を光り輝かせてみてはいかがでしょうか。

